
圧殺の音

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

圧殺の音

【Nコード】

N0775J

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

勤めていた会社が倒産し、今は派遣会社を通じ工場で働く雅敏。やがて、悪くなる一方の不況の中で、彼はある「音」を聞くようになる……。

くそ、やっぱりないな、などと小声で呟きながら中野雅敏はモニターを食い入るように見つめていた。煙草に火をつけ、白煙を吐き出す。画面に次々に現れるハローワークの求人情報は、介護や警備など、誰もがやりたがらないものばかりで、たまに商社の営業などがあってもボーナスがない、などと待遇の悪いものばかりだ。雅敏はつくづく嫌になって、ブラウザを閉じてため息をついた。煙草を灰皿に押し付け、溜まった中身をゴミ箱に捨てた。

そうだ、洗濯物取り込むか。暑かった夏は終わりを告げようとしているものの、日はまだ長い。1DKの狭いマンションのベランダに出て、干してあるＴシャツなどを取り込んだ。少しずつ首元が伸びてきている。新しいの買わなきゃな、と畳みながら呟く。が、その金銭的余裕がない。雅敏は自嘲して、再びパソコンデスクに座り、必死に求人案内を睨んでいた。やがて諦め、絨毯の上に横になった。明日は月曜か、また詰まらない虚しい一週間が始まるな。空腹を感じたので、侘しい晩御飯を一人で食べた。味噌汁と作り置きサラダとレトルトのハンバーグとグラタンを食べ、それからシャワーを浴びてテレビを見て寝た。

朝、早くに目覚め、型落ちの原付に乗ってカワサキ重工業の工場へ向かった。現在29歳の正敏はそこで日雇い派遣の立場で精密機械の製造と点検の仕事をもらっていた。それでもそろそろ4ヶ月ぐらいになる。巨大な数階建ての工場が建ち並ぶ中を、雅敏はすり抜け、駐車場に黒のＪＯＧを止めて更衣室に向かう。何度も挨拶をする。特に社員にはきつちりとする。哀れな日雇い労働者が正社員に目を付けられるとあっさりクビになる、と雅敏は勝手に考えていた。作業は8時から始まる。ライン製造と点検なので、流れてくる部品

を一つ残らず追われながら見て部品を取り付けないといけない。完全なる歯車のひとつに徹しきらねばならない。隣で作業しているもう少し年上の西山は時々大きなため息をつく。たぶん無意識にやっているのだろうが、時々鬱陶しくなる。黙々と作業に取り組むと、時間が経つのだけは早く、あつという間に休憩、食事、休憩、終了となる。タイムカードを通して18時には終わる。残業は全く無いのは不況のせいなのは誰でも知っていた。

週末の金曜日、仕事が終わった後雅敏は誘われて同じ派遣会社の者同士で安い居酒屋に飲みに行った。5人ほどで座敷に座り、乾杯をする。みな余り冴えない風体をしている。ほぼ同年代で集まっているので、話題は自然とこれからの事になる。

「生きてはいけても海外旅行とかにいけねえなあ」

「だなあ。車も持てないよ、ここの給料じゃ」

「でもハロワのサイトとか見てもろくな求人が無いんだよな」と雅敏がぼやいた。

他の四人も同意して頷いた。今は待つしかないな、と一人が悟りきったように呟いた。

「何か資格をとりたいたんだけどな」

「フォークリフトとかヘルパーなら潰し聞くかもな」

「そうだな、何かしないとな」

雅敏はそれを聞きながら、俺らはそういう努力を怠っているから現状このザマなんだな、と自嘲した。雅敏は自分の過去を思い出していた。高校卒業後、浪人中に親が離婚し、母方だったので資金の面で大学を諦め、フリーターになって、その後3年ほどして広告会社の営業職について、一人暮らしを始めた。だが、小さな会社だったので平成の長引く不況の果てに力尽き、半年前に倒産した。失業保険を給付されながら、ともかく、と言う事で人材派遣会社に登録し、カワサキ重工業の仕事をもらい、ともかく今は土日以外は働いている。だが、いつまで仕事があるか分からない。仲間ら

は競馬だのパチンコだの話を始めた。西山はギャンブルの話をする時本当に嬉しそうだ。雅敏は内心、なけなしの給料をつぎ込んで負けまくる彼らを憐れんでいた。勝てもしないのに、それも分かった上でやっているのだ、彼らは。雅敏自身は飲む、打つ、買うはしない、という潔癖症であるため、話題に入らず、つまらない気持ちで家に帰った。

休みの日も外に遊びに行く金がないので、雅敏は友達の家に行くか、図書館で時間を潰すか、大手の古本屋で大量の古本を買ってきて過ごすかだった。その古本屋は105円で多くの本が置いてあり、知らず知らずのうちに雅敏は読書好きになった。本棚は文庫本や新書で埋まった。ジャンルを気にせず何でも目を引いたものは読んでみた。ある時「格差社会」「下流社会」と言った時事評論の新書を買った。読んでいてつくづく自分の事だ、とうんざりした。そして、わかりもしないのに政治が悪いんだ、などと吠えてみた。新聞すらまともに読まないのに、彼には世の中の仕組みがわからなかった。そこで、有り余る時間を使い、ネットの検索システムを思う存分利用して、何故今不況なのか、若者に職がないのか、どんな資格があればこれからやっていけるのか、などを延々と調べてみるのだった。

やがて過ぎやすい秋の季節が到来した。職場に向かう時の風も心地よい。軽快にJOGを飛ばし、いつもの駐車場に停めた。すぐ横に白のZXが走ってきた。青の半ヘルをしているのは、最近派遣されるようになった女の子だった。茶髪が似合う、整った顔の子だ。雅敏は挨拶だけして工場へと入っていった。あの子、すごくいい感じだな、と雅敏はこのところ一切抱いていなかったほのかな高鳴りを感じていた。

作業をしながら、別れた恋人の事を思い出していた。3年ほども

付き合っていたが、会社の倒産とともに、雅敏から離れた。だが、それは雅敏のほうが悪かった、と思っていた。思うように再就職先が見つからないので苛立ち、きつい言葉などを浴びせるようになっていたからだ。今でももう一度、と思わなくもないが、もう絶対に会ってはくれないだろう。などと考えていたら一個部品を壊し、社員に叱られてしまった。

こんな俺だって、恋愛してもいいよな、と夜眠る時に雅敏は自問した。明らかにあの子、深原沙希に恋心を抱いていた。そこで彼は、朝待ち伏せて話しかけ、連絡先を交換した。断られるかとは思っていたが、案外嬉しそうに教えてくれた。メールで彼女に色々質問し、彼も自分のことを紹介した。モデルをやっていたと言う話を聞いて、ますます何かしら恋焦がれるものを感じた。何度か乏しいお金で食事やドライブに誘った。

車をレンタカーで借りて、海へと向かった。車内で和やかに話すうち、彼女は思った以上に物分りのいい人だと分かった。

「今は余りお金ないんでしょう。食事とか割り勘でいいよ」と言ってくれる。正直になるべきだ、と運転しながら思った。

「うん、実はその通りなんだ。俺一人暮らししてるし、カツカツす」

「うちの給料じゃあそうだよな。私は友達と二人暮らしだから家賃とかは半分で済んでるけど」

「いつから親と同居してないの？」彼女は少しの沈黙の後、私は孤児なの、と告げた。

「そうなんだ、苦労してきたんだね。俺も親が離婚してから苦労したよ、それなりに、だけどね」

すると沙希はほんの少しだけ笑った。何か、通じ合うものを感じてくれたようだった。

それから朝ある場所で待ち合わせ、一緒に通勤した。そして帰

りも途中まで一緒に帰った。一ヶ月ぐらい経った日、沙希は雅敏の家に泊まった。彼らは愛し合い、満たされて幸せだった。たとえ将来が全く見えない状態であっても。

彼らは資金がないので、休日は雅敏の家でのんびり過ごした。映画のDVDを借りてきたり、ひたすら性行為にふけったり、ネットのオンラインゲームを交代でしたりした。ある日曜日、テレビドラマをつけて見るでもなく見ていた。サスペンスで、冒頭でAV女優が殺された。胸をはだけた姿を見て、雅敏は前から思っていた事を言ってみた。

「こういう人たちって可哀相なんだよな。追い込まれてこんな仕事をせざるを得なくなるわけだ。俺の友達も友達にレイプされて自暴自棄になって風俗の世界に飛び込んで、シャブ中になって死んだんだ」

沙希は瞳を潤ませて、ただ頷いていた。そして、決意したように口を開いた。

「私、モデルをやっていた、って言ったでしょ。雑誌のモデルだった。でも、あれは実は嘘なの。私も一時期アダルトビデオの女優をしていたの。名も無い脇役ばかりだったけど」

雅敏は目を見開いた。だが、それでも彼女に対する気持ちは変わらなかった。彼は、そっと彼女を抱き寄せた。

「いいんだよ。生きていくのは修羅だ、地獄だ。でも生きないといけないんだ。問題はこれからだよ。俺が、きちんと就職して、きちんと稼いで、沙希を食わせてやる。過去は過去で、もういいんだ」

沙希は突如号泣して、雅敏の胸に顔を預けた。

「仕事が無かったのよ、高校出てきちんと就職して、事務の仕事してて、でも会社が潰れて。お金がなくて、カードローンで借りて、どうしようもなくなった時に街でスカウトされて……あーんあーん」
雅敏はいいんだ、大丈夫だ、僕の気持ちは何も変わらない、と言
い、激しく口づけした。二人は寄り添う一つの生き物のようだった。

年末が近づくにつれ、カワサキ重工業内に明らかな変化が起こった。同じ派遣会社の同僚の数が日に日に減る。理由も明白だった。生産数が激減している。これでは人は必要ない。幸い、雅敏のラインの生産は減っていないものの、これでは明日はわが身状態である。雅敏は決意していた。ともかく、どんな辛い仕事でもまず正社員になろう、そこからまた探せばいい。まして、俺には沙希がいるんだ。雅敏は一人まなじりを決していた。ふと、作業をしながら耳を澄ますと、ギーッ、ギシギシと何かが軋む音が聞こえる。なんだろう、と思うと、じきにそれは止んだ。

「幸恵の病気は酷くなる一方なの。睡眠薬を飲んでも眠れなくて、ずっと起きてるの」

ある日も家に来た沙希が、こんな悩みを打ち明けた。幸恵とは同居している同い年の25歳の女の子名前だ。

「病院には通ってるんだね」

「うん。でも、聞いてたら適当よ、精神科なんて。自己申告を鵜呑みにするだけで、何の治療にもならないわあれじゃ」

「長く苦しんでるのかい」

「もう半年。障害者年金はもらってるけど、あの子も働かないと苦しいわ。今はマンションの家賃は全部私もちだもん」

雅敏は財力のない自分を恥じた。なんとかせねば、と思っていた。ふと、微かに地震の時のような響きを感じた。が、すぐ収まったので気のせいかと納得した。

年の暮れ、雅敏は。×県立デイサービス介護センターと言う建物の中で面接を受けていた。飄々とした人事の面接官に色々な質問を聞かれた。

「年配の方のお尻まで拭かないといけません、出来ますか」

「はい、出来ます。必ずやります」

「夜勤もありますが、大丈夫ですか」

「出来ます。徹夜も苦になりません」

一週間後の土曜の朝に郵便が来て、本当に滑り込むように彼はこの正社員になることが出来た。沙希も喜んでくれるだろう、とすぐに電話をかけた。すると、何か様子がおかしい。話しているうちにどんどん取り乱しだした。

「落ち着け、なにがどうしたんだ」

「とにかく今すぐ来て。幸恵が、幸恵がね、降ろせないの」

要領を得ないが、ただ事ではないのは分かったので、原付ならすぐなので、ともかくも向かう事にした。

沙希のマンションに到着してすぐに雅敏は全てを理解した。初対面の幸恵は、窓枠にしっかりとロープを幾重にも結んで首を釣っていた。顔は真っ青で、失禁していた。

「朝、朝起きたら、幸恵が、死んじやってたの！」

沙希の言葉に頷き、雅敏は死体に近づき脈を測った。全くない。だが、それでも携帯を取り出して救急車を呼んだ。沙希はうつろな目で泣く事も出来ず絨毯に座り込んでいた。雅敏はそっと抱きしめた。それ以外何が出来ると言うのか。

「幸恵もね、同じみなしごだ、って話したでしょ」雅敏が頷いた。

「だから、職場で何かと辛い思いしたの。苛められて、家で泣いてた事もあった。それで会社を辞めて……」

グ、グーツとまた何かが大きな音を立てて動くのが聞こえた。雅敏にはその音の正体が何となく分かった気がした。玄関のインターホンが鳴った。救急隊員が三人入ってきた。ほぼ同時に、○×県警も入ってきた。

それはとても寂しい葬儀だった。親しい友人もほとんどいなかったのだろう、参列者は少なかった。沙希は気も狂わんばかりに泣いていた。雅敏も拳を握り締めて泣いた。心の中で自問していた。弱

い人間から死んでいくのか。それが世の掟か。そんなもの、クソ食らえだと思った。もう新しい年がやってくるのに、空はどんよりと果てしなく暗く、何か黙示録的な悪の到来をほのめかすようで、雅敏は曇天を見つめ怖気に震えていた。しかし、負けられない、と隣の沙希を見ながら堅く決意していた。

年が開け、雅敏は新しい職場で働きだした。確かに時には不潔で面倒な仕事ではあるが、腹を括った雅敏には十分耐えられた。沙希は、二人で暮らしていたマンションを解約して、雅敏の家と一緒に暮らしはじめた。だが、新年まもなくカワサチ重工業の仕事が無くなってしまい、また仕事を探さなくてはならなくなった。

「大丈夫だよ、俺といるんだから」

ともすれば昨年のことと沈みがちになる沙希に、雅敏は無理に働く事を進めようと思わなかった。それに、掃除洗濯炊事と言った家事をしてもらえるので、楽になったと感じていた。彼女は働き者だった。俺は、やっていける、と思っていた。

ある夜、二人でテレビを見てみると、ニュースで失業率がまた上がり、戦後初の6%になりました、と言っている。続けて、昨年度の自殺者数も戦後最悪の4万人台になりました、とキャスターがしかめっ面で伝えた。途端、雅敏の耳に大轟音でググーツ、グーツと言う音が響いた。思わず耳を塞いだが、一向に収まらない。沙希が慌てて、どうしたの！？ と聞いてくるが、鼓膜が痛くて返事が出不来ない。やがて、一分ほどしてそれはようやく収まった。雅敏は口を開いた。

「ローラーの音が聞こえたんだ。途轍もなく大きな音で、な」

「ローラー？ 私には何も聞こえなかったよ」雅敏は頷いて続けた。

「去年の暮れぐらいから時々聞こえてたんだ。巨大なローラーが、空から降りてきて、日本中をなめしてるんだ。そのローラーがのしかかると、弱い人から殺されちまうんだ。そう、今も」

沙希には彼の言うことが理解できた。幸恵もその無慈悲なローラーに轢かれて死んでしまったんだ。雅敏は沙希をしっかりと見つめて言った。

「だが、俺達はそうならない。断固ローラーを跳ね返して、強く生きていこう」

沙希は微笑んでゆっくり、しっかりと頷いた。雅敏は、跳ね除けるように右手を頭の上で強く振って微笑み返した。（終わり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0775j/>

圧殺の音

2010年11月12日16時25分発行